

# 小悪こあく

梶田豊

「今晚は雨が降るいうて、おかんが言ううとった」

「勝手に降れ」

「でも今晚ていつ。今も夜やろ」

広く暗い。そのなかに建つコンクリートの柱に丸い四つの文字盤が白く光っていた。その時計の針は十一時を指していた。柱の立つ場所をたもととして橋が長く延びており、向こうのたもとにも同じ柱と時計はあった。空には月も星も見えず、見上げた子供らは空が曇っていると知る、夜にも天気があると知る。

浜は無人で、その広い暗がりに吞まれそうになるのを堪えて三人は松林からの坂を下って来たところ。橋を含めて砂浜に敷かれた舗道には五十メートル間隔で電灯が立っていたが、朧な自然光のような効果で夜闇を照らすというより違った暗さに変えていた。波が強く打つそのざわめきを湛えながら浜は静かで、夏場の花火や夜遊びする人の賑わいはもう絶えていた。話しはじめた子供らはしかしすでにそのなかに溶け込んでいた。

一九八七年八月。小川原茂司と良太、薪原睦実にとっては小学六年の夏休みも終わりに近い夜だった。三人は何故夜に家を出て浜に来ているのか分かっていった。そしてそこはこれ以前の子供時代を集約して記念するような時であり場であったが、そこで集約されたと見える存在や時間や観念や個と個との認識や繋がりはまたその場で更新されて散り散りになるだろう。その発端もまた同じ夏休みに在った。

町は古くからの海水浴場で時代を経たこの頃にも一万五千の人口が夏場は十倍に膨らむと言われた。京阪神地域や中京から、列車やバスや車

で人が押し寄せ、砂浜は人とパラソルで埋まりサンオイルの甘い匂いがした。海に近く民宿の多い地区では人の声足音が絶えず賑やかで夕方になればピンク映画の上映とお化け屋敷を併設した娯楽場の宣伝カーが走り夜遅くまで人は絶えなかった。普段の町からすれば毎日が祭りのようで、客同士や客と地元民とのいざこざ民宿の主婦とアルバイトとの色恋に水難事故や交通事故と騒がしく、都会に於いてなら万国博でも来たかのように静かでのどかな町が活気と動揺を呈した。

そんな夏のある夕、町の小学生二人は窓のない冷房の効いた部屋に明かりをつけて漫画を読んでいた。夏休みの時間にも慣れた七月末のことだった。

小川原灰司も小川原良太も家は海の傍に在ったが、民宿でもなければ客の多い地区からも少し外れていた。良太は外で遊ぶのが好きな子供で仲間を集めてよく泳ぎにも出ていたが、六年生になったこの夏には人が多いからとか夏休み前にもう泳いだからと海で泳ぐのに熱心でなくなつて、家から徒歩三分程の灰司の家によく寄つた。

灰司は家で一人昼寝をしたりテレビを見たりと特に何もしていなかった。それが良太には何もせず何をしているのかと不思議に思えたものだったが、灰司に訊けばやはりただ何もしていないと言う。

灰司の部屋で、二人はもう三時間も漫画を読んでいた。

「なあ」と一方が見ていたページを相手に示し、見せられた方は「ふふ」と相槌のように笑って応じ、

「笑ける」

などと言つて無言に戻る。夕方五時に外で時報のサイレンが鳴る。家には子供二人だけ。サイレンから暫くして玄関に物音がし、音の仕方では誰の帰宅か分かる。廊下の床に太い足音がして灰司にはその足が自室でも居間でもなくこの部屋に向いていると分かる。機嫌が悪いと困ると思う。

音を立てて部屋の前が開いた。

「おい」

灰司と良太は顔を上げる。灰司の兄青児が廊下の窓からの光を背に立って笑っていた。

「暗い部屋で何しとん」

「電気つけとるし、漫画読んどる」

「見たら分かる。お前ら海行って女の写真撮ってこい。金やる」

青児が言った。ことのはじまりだった。

灰司、良太はその青児の思い付きも考えも理解できず、また遊びで、変なことをやらされると思っていた。

青児は高校一年生。夏休みに入って浜茶屋でアルバイトを始めた。浜茶屋というのは夏場だけ浜に小屋を建てて海水浴客に軽食や飲み物を売って休憩所を提供したり、手漕ぎボートを貸し出したりする店で、人出の多い浜だと海岸線一キロメートルに二十軒も並んでいた。そこで働きながら、青児は水着姿の若い女に目を惹かれ、写真に撮れば高校の同級生に売れると思い付いた。しかし十六になる風体も大人びた自分がやったのでは怪しまれるしそもそも恥ずかしい、まだ幼い弟にやらせればよいと考えたので、灰司といとこの良太に持ちかけて報酬も払うと言った。

灰司、良太はようやくやらんと答えた。それに裸ならともかく、知らない女の水着写真を金を出してまで欲しがる者などいるのかと疑問も呈した。青児は、子供のお前らには分からん、水着というのがまた良いのだと説いたが二人は理解しない。しかし青児の持ちかけは灰司に対してはすでに命令で、灰司が意見するのはそれから逃れたいため、思いつくだけの言葉を弄するが通じないとも分かっている。

諦めた灰司は良太も一緒にやるんだらうと当然のこのように巻き込んで話を運び、良太と灰司は二人ではどうにも無理だからと、他の友達も呼ぶことを青児に了承させた。名前が拳がったのが林希一と薪原睦実という二人。

この話に乗って来そうで知らない女の人の写真を撮るということに向いていそうな者。かつ二人にとって扱い易いこと。灰司良太を中心とし

ては十数人の遊び仲間がいたが、二人はそこから条件に見合った者その場で選り出したのだった。

同級生とよりも青児との葛藤が多かったせいか同級生の中では浮いていて大人からの視線を意識させられてもきたせいか、二人は仲間の親の存在もいくらか視野に入れていた。

たとえば希一の家は母親と祖母がおり過保護で甘い。だから希一に危害を加えるのでない限り口出しが小川原にまで及ぶことはない。睦実のところは煩くて、睦実が親から過去に二度、小川原二人とつき合ってはいけないと言われている。二人と遊んでいた睦実が勝手に大怪我をした二人からいじめられて明るさをなくすということが有ったからだ。だが睦実はしぶとく、小川原とのつき合いをやめようとはしない、また大人に告げ口などすることもない。それに希一、睦実が小川原と子ども会が同じだったこともあり青児とも親しかった。

青児は新たな二人に「招待状」として案内を書いた。件の写真を撮って来れば一日五百円あげるといふ大雑把なものだったが、これを灰司、良太が預かって翌朝子ども会のラジオ体操の際対象の二人それぞれに手渡しして誘った。希一、睦実はすんなりと誘いを受けた。さっそくその日の午後灰司の家に四人集まることになった。

小川原灰司の家は親が共働きで昼間は留守だった。青児もアルバイトに出かけていた。家に集まった四人はテレビを見はじめた。

昼の連続ドラマで中年の嫁が施設に入れた姑の生霊に憑かれてみるみる老け込んでゆくという筋の話でエアロビクスをする中年主婦のレオタード姿も滑稽に見えたが皆時間潰しのように見ていて灰司は姑が息子に離れたくないと哀訴する台詞を真似て希一や睦実にも言わせたりした。

灰司はそうして出かけることを先延ばしにしていると感じていたのだが、しかしやることを分かってはいながら何をどうしてよいか分からずやる気が出なかった。テストが有るので勉強をしようとか教科書を開くが勉強の仕方が分からず手を着けられないでいるうち何故勉強をしなればならないのかという気持ちになるのに似ている。海へ出かけて人前で

裸踊りをしてこいと言われる方がまだ主体性が働いてやり易いようにも想像された。

「行こか」

と、それでもドラマが終わったのを潮に灰司は言って腰を上げ、青兎から渡されたオートフォーカスのフィルムカメラを持った。似通った気分であとの三人も立った。

家を出ると浜の松林が見え潮風そのもののように海ではしゃぐ人の声など聞こえてくる。夏空の下、畑と民家の間を歩いて突き当たった松林への坂を登れば穏やかな波の響きも鮮明になって視界に砂浜と海が広がる。林の中に一軒小屋があるのは誰かの物置だろう。坂を下れば砂浜で、家から三分。

左右へお椀状に延びる海岸のどちらへ行っても人混みの浜はあったが灰司の家から近いこの辺りは人がまばらだった。左手に百メートルに渡るコンクリート造りの橋が架かってその下には幅二、三メートルの流れが流れていた。

小川の河口だが、川は砂浜に至って堤をなくしているので流れは砂を削ってその時々で筋を変え幅を変える。橋の長さはその振れ幅に対応するものなのだろうが百メートルは大仰だった。橋のたもとに時計柱が立っている。時刻は二時だった。

カメラを提げて、脱ぐつもりのないTシャツ、ズボンのままで浜に立つことは海で泳ぐことが好きでも得意でもない灰司にも違和感を覚えさせた。

「来てどうするん」

水着姿の若くてなるべくきれいな女の人を写真に撮るには盗み撮り対象があさっての方を向いているのでは駄目で、つまり視線も捕えろということなので、基本的には相手に声をかけて了解を得た上で快く撮らせてもらわないといけない。だが知らない人にいきなり写真を撮らせてくださいというのは相手が男であっても変だしその目的はといえば高校生の兄が助平心で人に売ることであり自分達もおこぼれに預かるう

という邪まなものだ。しかも自分達に一日五百円という金銭が必要かといえ、ばそうでもないし本当に貰えるのかどうかも怪しいものだ。ここにきて思いが巡る。

そもそも恥ずかしいし勇気が出ない。そこを灰司と良太はあとの二人にやらせるつもりだったのだが、なんだか四人ひとつになったように誰が誰にという気にもならない。

四人は砂遊びをはじめた。砂を投げ合い、穴を掘って希一を服のまま埋めて和やかになって、しかしどうしようと悩んだ。それでその日は日が暮れて、また明日となった。

四人はその一週間ほぼ毎日集まった。午後灰司の家に集合し、昼のドラマを見てから浜へ出かけた。灰司の家から近い人のまばらな橋のたもとを起点に、西へ行っても東へ行っても人混みはあったのだが、東、浜へ出て右の方へ行くと学区が変わって馴染みが薄いため、この場合学区など関係ないのに四人は自然と左手の橋を渡って西の浜へ向かうのだった。成果は一向に上がらなかった。

四人は浜に落とし穴を作った。漫画でしか見たことないものを自分達にも実際に作れると知るのは面白かった。一度灰司はカメラとは別に爆竹とライターを持っていた。誰からともなく思い付いて、爆竹を時限式にしてみた。

四人は橋の東詰めにおり、向こうから渡って来る三、四人連れの大人を見た。五十メートル程離れていたが、その一行を狙った。

火が導火線を伝わる速度は一定だから、五十メートル先から歩いて来る人がこの地点に至るまでの時間を目測して、点火から着火までの時間と照らし合わせて導火線の長さを調節すればいいのタイミングを計ることはできた。だが細かな計算などできない子供らはあてずっぽうに導火線を長くして火をつけると逃げ、松林への斜面の草陰に隠れて注視した。すると一行が橋詰めに至った丁度その足元で爆竹は弾けて激しい破裂音を連発した。大人らは跳び上がって驚き騒いで子供らはその首尾に驚き笑った。しかしとところでどうしようかとまた悩むのだった。

（続きは本誌でお楽しみください。）